

ほなひ歴史通信

第82号

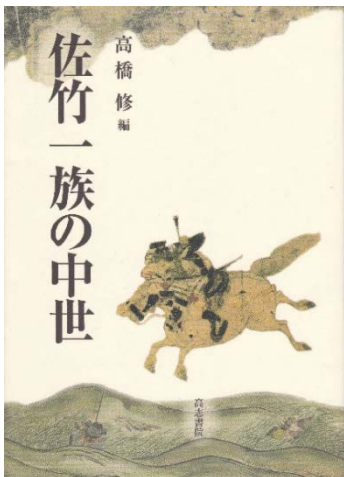
2017. 3. 1

佐竹氏研究の最前線

―『佐竹一族の中世』の刊行によせて―

平成二十九年一月二十日、高橋修編『佐竹一族の中世』（高志書院、本体三五〇〇円＋税、以下「本書」と略）が刊行されました。研究者が最新の佐竹氏研究の成果を一般読者に向けて発信している書籍は、自治体史を除いてこれまでほとんどなく、五百年にも渡る常陸時代の佐竹氏の歩みを総括するような本もありませんでした。本稿では、常陸佐竹氏研究の歩みを振り返り、本書刊行の意義を紹介したいと思います。

一九六〇年代に藤木久志や福島正義等による先駆的な研究成果が発表されていますが、佐竹氏に関わる資史料の発掘が十分でなく、未解明部分を多く残していました。しかし、八〇年代～九〇年代にかけて、県内外の自治体史編纂が盛んに行われ、それに伴い、多くの関連史料の発見及び紹介が進みました（『大子町史』刊行もこの流れに含まれます）。特に、平成三年及び六年に刊行された『茨城県史料』中世編Ⅱ・Ⅲで、「秋田藩家蔵文書」（秋田藩の修史事業に伴い、佐竹氏が家臣に提出を命じた古文書等の写）の大部分が活字化されたことで、佐竹氏関係史料の利用が容易になりました。これらにより、ようやく佐竹氏研究の土壌が築かれたと言えます。



八〇年代以降の市村高男、九〇年代からの佐々木倫朗・今泉徹等による研究は、自治体史編纂によって見出された一次史料（当時作られた史料）に立脚した成果であり、伝承をもとにすることも多かったこれまでの戦国期佐竹氏の叙述を大きく変えました。その後、平安後期や室町期の佐竹氏を取り上げた研究も進み、中世佐竹氏の全貌が徐々に明らかになりました。また、佐竹氏と上位権力や公家社会との関係、儀礼や官位、佐竹氏の地域経営等、多様なアプローチからの研究も見られるようになりました。しかし、佐竹氏そのものを取り上げた研究はまだ数も少なく、佐竹氏自体を本格的に議論する状況には至っておりません。

そのような中、総勢一八名にも及ぶ執筆者による本書が刊行されました。本書中の各論は最先端の中世史研究に基づくもので、いずれもこれまで語られてきた佐竹氏像の見直しを迫っています。特に、各自自治体史編纂以降大きく研究が進む東国政治史の成果を受け、常陸にとどまらない全国的、東国史的な視野から佐竹氏の動向を位置づけたことは注目に値します。まさに、最先端の佐竹氏通史と呼べるでしょう。佐竹氏にまつわるコラムも多数収録され、佐竹氏を知るためのガイドブックとしての利用も可能です。

驚くべきことに、本書の執筆者の大部分が二〇～三〇代の若手研究者であり、それぞれが研究者、高校教員、自治体の文化財担当者や学芸員として活躍しています。これだけ多くの若手が佐竹氏研究や常陸の地域史を担っているのは大変喜ばしいことです。本書を塗り替える成果が生まれる日はそう遠くないでしょう。

佐竹氏研究の今を知るためにも、ぜひ一読ください。

（藤井達也）

大子町に来て思う

保坂太郎

東京から大子町に越して来て、町の観光振興に携わり一年近く経った。大子町は袋田の滝、温泉などの観光資源や、奥久慈軍鶏、りんご、蒟蒻、茶などの特産品もあり、特に行楽シーズンは観光客で賑わう。また、年間を通じてイベントが多く、「花火大会と灯籠流し」や「百段階段でひな祭り」などには、数万人の観光客が一度に訪れ大賑わいになる。昨年の県北芸術祭には延べ一七万人の来場者が大子町を訪れた。私の家族や友人も大子町を訪れ、定番の袋田の滝や温泉、県北芸術祭の会場などを案内した。

一方、大子町にはこれら定番の観光スポット以外にも、紹介しにくくなるような魅力がある。それは、この地域ならではの人の温か味であったり、地元の人との出会いだ。人との出会いは観光の商品としては扱うことが難しいが、だからこそ貴重な経験となり、思い出となる。本稿では、そんな人との出会いを中心として町の魅力について紹介したい。

まず、真つ先に思い浮かんだのが商店街のとある飲食店だ。大子町に来て間もない頃、商店街にどんな飲食店があるのだろうと思いつつ、片っ端からお店を訪ねた。その飲食店での一幕である。お店に入ると、さつそく女将さんから「どっからきたの？」と話しかけられる。「仕事で東京から大子に越してきました」「あらそう、わざわざ東京から。で、どちらにお住まい？」「〇〇です」「あ、そこは昔〇〇さんが住んでたところね」といった会話を楽しみつつ、住まいや仕事、家族のことまで一通り話してしまつたと気づく。根ほり葉ほり、プライベートもないのであるが、何も知らない土地に来て間もない私にとっては、逆に親近感や温か味を感じる出会いであった。お店によってスタンスの違いはあるが、大抵初めての客には興味を

もって接していただける。旅先のお店でこんな出会いがあれば、いい思い出になりそうだ。

もう一つ紹介したい話がある。これは私の妻が赤ん坊を抱えて路線バスに乗ったときのことである。町の路線バス、普段はあまり乗車していないのだが、学校の帰宅時間と重なり、バスは小学生でいっぱいであった。妻は赤ん坊を抱えて立つしかなかったのだが、すぐに年長らしき小学生が「どうぞ」と席を譲ってくれたのだという。席に座ると、今度は小学生たちが赤ん坊を覗き込んで「かわいい、かわいい」と口ずさむ。バスの中で子どもが席を譲り、赤ん坊を可愛がる。何とも素敵な光景ではないだろうか。

今までの二つのエピソードは、お店の方や子どもたちの普段通りの暮らしの中の一幕なのだが、もし、旅行者がこんな経験をしたら、大子町のファンになるのではなからうか。観光形態が団体旅行から個人旅行へ、物見遊山から体験志向へと移り変わる中、都会では薄れてしまった人とのつながりを求め、地元の人との出会いを楽しむにしている旅行者も多いのではないかと思う。人との出会いは偶然的な賜物ではあるが、町のあらゆるところに出会いのチャンスはある。

これも大子町に来て間もない頃、二〇代の青年からまちなかの歴史を案内してもらった。二〇代と思えないほど歴史に通じているのだが、それ以上に、この町の歴史が好きで、誇りに思っていることが伝わった。何かに熱中している人の言葉は心に響く。

この町の自然や風土、歴史、街並みが大好きという地元の人結構多いのではないだろうか。旅行者がそんな人と出会うことができれば、町の魅力を深く感じてもらえそうだ。そして普段通りの姿に旅行者は感動するのだろう。私もこの町に来たのだから、旅行者を感動させられるように頑張りたい。おっと、頑張るといふ時点で不自然か。普段通りで飾らずにいきたい。

(大子町観光商工課兼まちづくり課長)

「ふみの森もてぎ」の開館と歴史資料展示室の展望

須藤千裕

栃木県芳賀郡茂木町は、栃木県東部に位置し、人口約一万三千人の小規模な町ですが、栃木県内の道の駅第一号であり、第一回道1グランプリを獲得した「道の駅もてぎ」や、国際的モーターレースが行われる「ツインリンクもてぎ」、棚田のオーナー制度、町内を走る真岡鐵道のSLといった豊富な観光資源によって、毎年二〇〇〇三〇〇万人の観光客が訪れています。

その茂木町に、平成二十八年七月十六日、「まちなか文化交流館ふみの森もてぎ」が開館しました。「ふみの森」は図書館を中心とした複合施設で、茂木町の文化の拠点として歴史資料展示室・ギャラリー・カフェ等を併設しています。図書館の開館は町としては初めてのことであり、居住地などに拘らず誰でも利用登録ができる開かれた施設です。最大で一二万冊を収蔵できる書架は、開館時は約

四万冊からスタートし、町独自の図書分類を用いて排架、読みたい本を探しやすい工夫をしています。蔵書も一般書だけでなく、町と関連の深い歴史や里山、食、たばこといった地域資料を収集し、充実を図っています。

歴史資料展示室では、年に二〜三回、茂木町の歴史に関する企画展を開催しています。左右の壁面には作り付けの展示ケースを設置。また、移動可能な独立ケースも三台あり、いずれも展示資料保



歴史資料展示室



歴史資料展示室前に設置された茂木町歴史年表

護のため湿度調整ができる仕様になっています。このような、歴史資料を展示する場所が設置されるのも、町では初めてのことです。

平成二十八年の七月から九月には「開館記念特別展 資料が語る茂木の歴史 四つの視点から」を開催し、古代から現在までの茂木町の歴史を紹介しました。十二月からは「テーマ展 茂木のお城」と題し、町内に残る中世城郭を紹介する展示を行い、「茂木町にこんなにお城があるとは知らなかった」「お城に

行ってみたくなった」といった声をいただきました。平成二十九年一月三十一日から三月三十一日まで「企画展 近江商人島崎利兵衛家」を開催しています。島崎利兵衛家は、元禄十六年（一七〇三）から茂木で主に酒造業を営んだ近江商人の家で、「ふみの森」はその跡地に建設されました。島崎家で使用されていた蔵は解体・移築され、「ふみの森」の「ギャラリーふくろう」「町民ギャラリー質蔵」として利用され、ほぼ週替わりでバラエティ豊かな展示が開催されています。また、島崎家に伝わる三万点に及ぶと推測される膨大な歴史資料は、現在町が所管し、平成二十四年から二十七年までに、約一万二千点が調査されました。

「ふみの森」に歴史資料展示室が設置され、町民の方々が自分の町の歴史に触れる機会が増えました。今後も「ふみの森」では島崎家資料をはじめとして、町内に眠っている歴史資料を展示し、町内外の方々に茂木の歴史を知ってもらう取り組みを進めていきます。

（茂木町教育委員会）

生瀬の乱の伝承の成立と変容過程について（上）

高橋裕文

水戸藩領における生瀬の乱は長らく伝承として語られ、その内容の違いを比較し実態をつかもうという研究がこれまでなされてきた。その前提として、生瀬地方の民間伝承が元となっていると考えられてきたのであるが、調べれば調べる程内容が多岐にわたりますます実態が見えなくなってくる。そうした中で、生瀬の乱の研究に先鞭を付けたのは肥後和男氏であり、地元の大藤家の古文書を紹介し生瀬の乱が事実であることを示した（『生瀬の乱のこと』『茨城県史研究』第二号、一九六五年）。その後、生瀬一揆の原因は手代襲撃の暴動であるとの通説に対して、益子公朋氏は百姓一揆ではなかったという新説を出したが（『生瀬乱再考』『大子町史研究』第八号、一九八〇年）、私はむしろ伝承の核となる最も古い史料を確かめ近世初期の武力一揆であると考えた（『保内の農民騒動（上）』『大子町史研究』第三号、一九八五年）。その後出された飯嶋和一氏の小説『神無き月十番目の夜』（河出書房新社）は、この説に基づいていると思われる。はたして生瀬の乱の伝承と史実はどこまで接近できるのであらうか。そこで、問題の立て方として生瀬の乱の伝承は一体どこから発して、どのように変化していったのかを探り、この乱に対するそれぞれの立場を考えてみる必要がある。生瀬の乱およびその伝承に関わりがあると思われる立場の者を列挙してそのアプローチの仕方の違いと変化を考えてみたい。

〈幕府の記録〉

幕府の記録にはこの生瀬の乱に関わる記事は一切ない。しかし、『探旧考証』には慶安元年（一六四八）の水戸藩の寺社領改帳に慶長十四年（一六〇九）に伊奈備前守忠次が小生瀬村を一村成敗した

と記されているとある。伊奈備前は幕府の関東代官頭であり、かつ水戸藩の民政を取り扱っていたので、幕府としても当然この事件は知り得たはずである。それどころか、『当代記』や『徳川実記』によればこの事件以前に徳川家康が大番頭・大番士・鉄砲同心を水戸領に送り込み、事件後引き揚げさせているのである。こうした点から見れば、この事件にもっとも関わりがあるのは徳川家康であったといえよう。

〈水戸藩家中の伝承〉

水戸藩でこの事件に関わりがあるのは伊奈備前と芦沢伊賀である。伊奈備前は事件の翌十五年に死去しており、その伝記や頌徳碑にもそれに関する記述はない。芦沢伊賀はその後も水戸藩の重臣として政務に当たったが、芦沢家文書などに記録を残していない。ところが、水戸藩家中には生瀬の乱の言い伝えが残されており、水戸藩の作成した元禄十四年（一七〇二）の「近代諸士伝略」伊奈忠次の項に「曾テ常陸ニテ一揆蜂起ノ時忠次急ニ人数ヲ催シ悉クコレヲ誅ス」と家中の古老談が組み込まれている。この言い伝えを収集したのが谷田部自得であったが、それをもとに天明く文政にかけて高倉逸斎や小宮山楓軒、岡野庄三郎等がこの言い伝えの検証を行った。事件の年代の解釈をめぐる議論がなされたが、慶長十四年ということと落ち付いた。この家中の言い伝えが幕末まで続いていたことは山川菊栄『幕末の水戸藩』（岩波書店）にも記されている通りである。であるから、生瀬の乱の伝承の源流は水戸藩家中にあったのであった。

（那珂市在住）

大生瀬分校回顧記―学校事情今昔考

齋藤仁司

時代背景は、昭和三十年代後半から四十年代になる。私が通学したのは町立内大野小学校大生瀬分校（以下「分校」と略）である。

分校は一・二年と三・四年の複式学級で、四年生まで分校で五年生から本校（内大野小学校）で学ぶ。入学した三十七年の分校同級生は男一〇・女四の一四人で、分校全員では四〇人位であった。先生は教務主任、一・二年担任、三・四年担任の三人だった。五年生は本校に行くのが多かったが、中には下野宮小学校に入学する人もいた。私の姉達三人は、下野宮小学校・宮川中学校に入学した。その意味では、学区の境界であった。入学・卒業式や運動会等は分校から本校へ徒歩で行くのだが、多人数でとても緊張したことが懐かしく思い出される。児童は熊の久保・大和、真瀬の久保、打越に大きく三分される。熊の久保・大和方面の児童は、大生瀬神社前の弁天橋を渡り三〜四キロの道程を通った。真瀬の久保の児童は田の畔道から山の中の峠を越え、分校に至る三〜四キロの道程だった。高低差百メートルを超える山道を毎日通ったため児童は健脚揃いで、運動会等で活躍したとの記憶が強い。分校は六十二年に閉校し、同年新生生瀬小学校に統合された。

給食についてみよう。一年生当時は弁当持参だった。冬期の弁当といえば、内側がトタン張りで三段に金網で仕切った木製の暖飯器が懐かしい。燃料は木炭。先着順でアルミ製弁当を入れ、位置が決まるが、下段と上段では暖まり方が違うので先生は上下を入替えて公平を図った。火鉢に近いと時々焦げが出たりした。

教室の暖は薪で石炭に火を点ける達磨ストーブだった。薪は裏山の地主の許可を得て、数人交替で拾い集めた。点火は当番で行った。下校前には明朝の為に石炭カスを処分した。暖飯器の炭も

同じ当番が行った。雪の朝は教務主任が点火してくれ、積雪の日には、校庭を隣家の人、通学路を父兄や地域の人が除雪してくれた。

昭和三十九年頃には給食が始まった。ただ給食と言っても当初は脱脂粉乳を温めたもので、弁当持参は変わらなかった。教員住宅の隣に父兄の労働奉仕で給食室が出来、母達が食材を持ち寄って調理し、汁の提供が始まる。四十年と思うが、給食の先生（町職員）が配置された。当初は母達が手伝っていた。自校調理方式給食である。四十年に第一学校給食センターが頃藤に、四十二年に第二学校給食センターが川山にでき、センター方式の給食が始まった。当初はコッペパンと脱脂粉乳の給食だった。次に瓶牛乳になりおかずが付き、米飯給食に変遷する。けんちん汁・味噌汁、煮豆・根菜と肉の角煮・野菜炒め・きんぴら・カレー等で三角巾を被り二人組の給食当番が配膳した。五十三年にセンターが統合され現在に至る。平成二十二年から配送業務が民営になった。ピーク時には約五千七百食であったが、平成二十二年から幼稚園が加わり、現在は千三百八十食である。昭和四十二年当時の給食費は月額で小学校七百五十円、中学校で八百五十円であった。平成二十八年度現在は幼稚園三千八百円、小学校四千円、中学校四千五百円で、子育て支援政策により半額や無料化の時期もあった。清流高校については予約制ではあるが、一食二百五十円である。

次に放課後の生活である。学校が終わると野良遊びが主流である。地区内の上級生がガキ大将である。鞆を置くと、下級生の面倒を見ながら集団で、アケビ、山萁、桑の実、タラの芽、コシアブラ等の植物採取に、あるいはバッテリー仕掛けや鳥餅・霞網での小鳥捕りに駆け回った。こうした遊びは結果的に家庭の食に役立つ、親に喜ばれるものとなった。他に遊びでは釘打ち、ペー独楽、B玉、パーぶち、缶蹴り、野球、木登り、川遊び等がある。薪拾い、水汲み、風呂沸かし、子守りも重要な役目である。家の手伝いをし、よく妹を背負って遊んだ記憶が懐かしい。（大子町在住）

依上地区、ある農業青年の挑戦物語（下の二）

―特産品・りんごのルーツを探る（五）―

りんご栽培が大字町内に急速に広がる半面で大きな課題となつたのが販路の開拓であり、東京市場で活路が開けないなか、リーダーの黒田宏さんにあつても地元での個人販売に取り組まざるを得なかつたことは本誌第七七号でふれた。早生種とは比べ物にならないほどおいしいりんごが取れるようになった木澤源一郎さんにとつても、販売事情は同じであつた。

昭和三十四年秋に植えたゴールデンデリシヤスとスターキングの苗木は順調に育ち、十年ほど経つた四十三、四年の頃から実をつけ、収穫できるようになる。さあどう売るか、販路の開拓がいよいよ差し迫つた課題となつてくる。

様々な取り組みが開始される。まず、市場への共同出荷の方向を目指した。市場に出すには品質を揃える必要があるということから、大字町農協に要請して選果機を一台設置してもらつた。各地区の生産者から集めたりんごを選果機にかけて揃え、出荷したのだが、「二年もたなかつたんですよ。農協では思い切つて投資してくれたんですが、出荷しても思うような値段で売れなくて。やっぱり量がまとまらないから経費がかかっちゃうんです、機械代とか人件費とか。量が少なかつたからね。また、品質にもものすごく差があつてバラバラで。人によっては、農協に出荷したものの半分は返されちゃつて」と木澤さんは語る。かくして、多少の代金は入つても経営的に採算が合わない状態が続いた。例えば、水戸の青果物市場での奥久慈りんごの扱いは次のようであつた。「買ったたかれてだめなんです。青森の産地の半分もしない、値段が。市場っていうのは、安定して大量に入つてくるお得意さんは大事にして、少量の出荷は食い物にしちやつて。とにかく安

くて」。共同出荷の、これが現実であつた。

地元での販路はどうであつたのか。昭和四十三年、大字北田気の久慈川べりに大字青果市場が開設された。「そこへポツリポツリ持つていったんですが、売れなくて」と言う状態だつた。また、四十五年八月には「日本で最初の大自然果樹公園」と銘打つた施設が大字小生瀬に誕生した。これは、黒田宏さんが立ち上げた観光施設であり、「野鳥の声を聞きながら、遠く那須・日光の連山を望む雄大な生瀬台地に、総面積二〇万平方メートルもある、大自然観光果樹公園『袋田フルーツパーク』がお目見えしました。この公園は、くだものだけでなく、ふるさと山の味覚山菜料理、各産地もの手打ちそば・こんにやく、ジンギスカン料理もたつぷり楽しめます」（昭和四十五年九月一日付「広報だいご」と紹介されている。この施設は新たな販売拠点になる可能性もあり、朗報であつた。木澤さんら生産者は皆、「持つてきてくれ持つてきてくれと言われ、自分でカゴ詰めしてどんどん納めた」と言う。オーブンしてから「二年ぐらいいはものすごくお客が来て、フルーツパークでりんごはよく売れた」ようである。その影響もあつてか、共同出荷のためのりんごはなお一層集荷できず、「選果機が遊んじやうのような状態になり、共同出荷するんだから選果機を入れてくれ入れてくれとお願ひされたから入れたのに、なぜ農協に出荷しないのか」との厳しい指摘を農協側から受けたとも語る。しかし、有力な拠点であつたこの施設も長くは続かなかつた。残念ながら、始まつて四、五年ほどで閉鎖を余儀なくされる。

市場への共同出荷もままならず、地元での販路も確保できないなか、木澤さんは「どうしようもなく小売りに歩く」道を選ぶことになる。昭和四十年代半ば頃、茨城県内ではすでに梨、栗、ミカン等を中心に観光果樹園化の動きが広がりがつあり、大字町のりんごについても例外ではなかつたが、木澤さんにとつてはまだそれを目指す状況ではなかつた。

（齋藤典生）

関鉄之介の日記を読む(二)

十二月二十三日、高柴村へ出発し、「桜岡へ帰来にし、夕より談出しける歌」を書きつけた。

「君が為積るおもいも山の端の 月に今宵はかこちてしかな
妻や子の待ら舞ものを我身のみ 独りはひしき歳の暮かな」

十二月二十四日「療養ひま取申候に付、幸手駅へ参り、名医に相掛り可申候内談一決す」と、大藤勇之介が、知人秋間雄介を通して、幸手宿(埼玉県)の医者を紹介する。

万延二年(一八六一)正月二日、「村里の衆民、相携て来り賀す、終日不絶酒なととのへて去る」。十二日、桜岡家の下僕与市を伴い、幸手宿に向った。二月十九日に文久と改元する。

三月十三日、幸手宿を去り、袋田に帰ったのは十八日であった。「河鹿鳴山川みつのうきふしにあはれはかけよ はるの夜な夜な
春も亦くれんとすらんよもすから かはす鳴くなり袋田のさと
春はたた 老木のさくら ひと本の 身をかくすへき かけは
有けり」と詠んだ。

三月二十五日、内大野村の石井重衛門が来て、水戸の事情を談す。桜田門外の変の残党狩りが活発化して岡部三十郎が幕府の捕吏に捕えられたのを知った。関は「可憐可憐」と歎いた。桜岡家に潜んでいた関は、与市の案内で高柴村の益子家へ向かった。

三月二十九日、高柴村の益子喜衛門ら四名に歌を贈った。

「終に身を秋は紅葉にうもらせて 春はさくらのはなと見なまし
内大野村の石井重衛門へは、

「終に行みちにしあれば君かためこけの下までちきらさらめや」
小生瀬村の大藤勇之介へは、

「終にまた身をおく山の下芝につゆのめくみはかはかさりけり」
小生瀬村の金沢惣七郎へは、

「終更におもふこころは春風のたちいてて世にかよはさらめや」

益子家では、高橋多一郎家に奉公していた益子の姪お玉と再会、歌を贈った。

「立かへりあふともしらぬことの葉にさきたつものは涙成けり」
三月晦日、益子喜右衛門と「すぎしむかしの事語りあへつつ、旅のあはれも一しほふかく、ものなとたのもしけに心付られてこころの中嬉ひにたへす」と、五年前の安政四年(一八五七)正月八日にこの地で行われた農兵の軍事演習を語り合った。

四月四日、益子喜衛門に送られて生瀬滝にかかり、岩松やしのぶなどを採りながら、「花もちり春もくれ行あめの日にしのふてふ名の艸をひくかな」と、袋田の滝を経て桜岡家へ下りて行った。

四月二十一日与市を召し連れ、桜岡源次衛門一家へ別れを告げて袋田を立ち、一条通りへ入る。山間の間道をへて西金村小室吉十郎方に至り一泊、翌二十二日吉十郎兄弟に舟で山方まで送られ、二十三日田谷村に着く。五月二日の夜深く、父の墓に詣で「帰るさへ 安からぬ子の心をも かへられ無て知らすやありけん」と詠んだ。日記はこの田谷村潜居中の五月二十二日で終わっている。

五月二十八日、英国公使館襲撃事件(東禅寺事件)が起こると、幕府は、七月二十六日、獄にあった金子孫二郎、岡部三十郎ら七名を死罪にして、八月、東禅寺事件残党逮捕について指名手配を令達した。その中には、関鉄之介が含まれていた。

八月二十日、水戸藩の残党に対する追求が厳重になり、九月一日には、北は高柴村から、南は東染村に至る山狩りを命じた。

関は、文久元年(一八六一)十月二十三日の夜、越後国上関村雲母温泉で、水戸から追跡してきた水戸藩吏に捕らえられ、十一月七日、水戸の赤沼の獄に繋がれた。翌二年三月三日、獄中で、「紅葉のちりての色の変らぬを 終に行身のおもひ出にせむ」と詠む。四月五日江戸に檻送、伝馬町の獄に投ぜられ、五月二十一日斬罪に処せられた。享年三九歳。「親々の形見なりにし玉の身を 今日しも君に捧げぬるかな」の時世の句を残す。

(野内正美)

「んにやくの神様（四）」

私の高祖父のコンニャク栽培研究（病害防除と薬剤散布）

コンニャクを安定して大量に栽培する上で、苦勞する事の一つは、病氣との戦いである。

勝次は「蒟蒻栽培上一番恐ろしいのは葉トロミ病（乾性腐敗病）」だと述べている。勝次の記録によると、一番最初は大正二〜三年（一九一三〜一九一四）頃に、畑のコンニャクが完全に葉が開かない状態で葉も茎も黒色に腐敗して、植玉が枯死してしまうという病状が出たらしい。辛うじて自然生の一部のみが生き残ったが、被害は甚大だったようだ。

この病氣の原因は台風で、葉擦れ、茎折れに加え、高温多湿の時期に感染しやすく、また、コンニャクの葉の日焼けも原因の一つのようだ。その後も台風が来るたびにこの症状と戦うことになる。勝次の記録からも、何度も台風の被害を受け、収穫時の減収や生仔（キゴ）と呼ばれる種芋の成長にも影響を与え、翌年の減収にも拍車をかけることからコンニャク栽培の中で最大の恐怖だと述べている。

勝次は「防除方法としては合理的な施肥を行ひ常に健全な状態に保つこと」であ

り、「薬剤散布をして予防を行うことである」と述べている。

この薬剤散布は他の病氣や害虫予防にも効果があり、記録を見ると、昭和二



消毒噴霧器（ハンドブラザー）



消毒噴霧器のパイプ（竹竿製）

十四年（一九四九）から二十八年頃は、七月中旬から下旬に二回、八月は三回、九月上旬と下旬に二回と計七回はボルドー液を畑に散布していた。この他にも、雨や台風などでボルドー液が流されてしまった場合に薬剤を散布する必要があったと考えられる。

ボルドー液とは、野菜や果樹など農作物の殺菌剤として使われる硫酸銅と消石灰の混合溶液のことである。大子町教育委員会で収集した用具の中には、このボルドー液を散布するための消毒噴霧器や消毒機に取り付ける鉄や真鍮でできたパイプや噴出口、中には竹竿を利用したパイプも現存している。

勝次がコンニャクの栽培の研究をしていた大正から昭和二十年代は、今のような大型トラクターや機械式での撒布ではなく、手動式のポンプによる撒布が主流だった。ポンプを押す人、ホースを持つ人、パイプを持って葉や茎に薬剤を掛ける人の三人態勢で行ったという人もいる。その後動力噴霧器になり、一人で背負って作業できるようになって、暑い時期に薬剤から身を守るため、完全防備で重いポンプを背負って、何度も広い畑を往復することを想像すると、先人の苦勞とその苦勞から対価を得て豊かになろうと努力したパワーと信念に頭が下がる思いがした。

参考文献 菊池勝次著『蒟蒻栽培の研究』（昭和二十九年五月発行）（家田望）

編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人

齋藤 典生（大子町歴史資料調査研究員）

野内 正美（大子町歴史資料調査研究員）

井上 和司（大子町歴史資料調査研究員）

藤井 達也（大子町歴史資料調査研究員）

家田 望（大子町教育委員会）

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地
大子町立中央公民館 ☎ 0295（72） 1148